

第三章 36) ビラ・コスチーナ耕地 (カザ・ブランカ駅)

リベイロン・プレート、バタタイス、フランカ、リファイナ、コンキスタ、ミナス州



ビラ・コスチーナ耕地 カーザ・ブランカ駅

*長瀬明、1913年2月、帝国丸、熊本県熊本市近見町出身、同駅ビラ・コスチーナ耕地で義務農年遂行後、各地を転じながら農業に従事。1918年プロミッソン上塚植民地に入植。後年サンタ・アマーロ在住。(「熊本県人発展史」142ページ)

*大塚三郎、1913年10月、帝国丸、熊本県菊池郡大津町字室町出身、同駅ビラ・コスチーナ耕地で就労すること2ヶ年後、アララクワラ線で綿作りに従事する。その後聖市で野菜作り、後年菓子屋を開店する。(「熊本県人発展史」337ページ)

*鍋島信太郎、1913年10月、帝国丸。(「平野25周年史」)

*上野米蔵、1913年10月、帝国丸。(「上野米蔵伝」)

*稗田寅次、1913年10月、帝国丸、熊本県菊池郡北合志村出身、隈部豊次氏の家族構成員で同耕地に配耕され、当時の通訳は鎌田氏であった。義務農年終了後ソロカバナ線へ移転、さらにノロエステ線に移転、この沿線の全盛期が1931年～38年で以後パラナ州へ移りトレスバラス移住地に到着く。(「トレスバラス移住地開拓20周年史」575ページ)



*家入平太郎、1913年10月、帝国丸、熊本県阿蘇町の石出身、同駅ビラ・コスチーナ耕地に就労中の2年目にハツ夫人が死亡、前途多難の渡伯初期であった。(「熊本県人発展史」)

中平三夫氏「蕃地の上に日輪めぐる」より転載(1958年)

*中平三夫、1919年、鎌倉丸、長野県上伊那郡、17歳で渡伯日給労働。
(「ブラジル同胞」110ページ)

カナーン、ジャタイー、ビラ・コスチーナ地域は隆起が激しく耕地内に石が散在、また耕地が石山で初期の移民達(鎌田信一郎通訳と150家族)は食うに食えず、待遇改善を求め耕主と対立し罷業、耕地側は兵隊30名を連れて来て発砲、遂に血の雨を降らす騒動となり、このストライキ事件で脱耕、ときの州農務長官がこれら日本人コロノの行動を憤慨、日本人について「動揺性に富、転々と耕地を移動し特に脱耕の際にしては団結して事を起し、夜逃げとし、また他の誘惑に乗せられ退去する方法が辛辣味を加え」と分書に公表したため日本移民の継続が危なくなる事態を惹起した。

*矢崎節夫(長野県第1回笠戸丸自由移民)、1914年第10回移民帝国丸の移民を引率して、モジアナ線カーザ・ブランカ駅ビラ・コスチーナ耕地の通訳として赴任、在職7ヶ年。1921年海興の所有するパウリスタ線コレゴ・リコ駅附近のアニューマス農場へ2代目支配人として就職。

ビラ・コスチーナ耕地の通訳の折、氏曰く「みんなコロノ生活と云うものは1年め赤字、2年目してやっと自給自足、3年目でやっと黒字になる順序なんだ。諸君がまたこの地で騒動を繰り返したなら日本人移民そのものが禁止されてしまう事に成る。」

また矢崎氏の尽力でガルサ植民地が開かれる事になる。その頃の矢崎氏はまだ耕地の監督として残り開拓は若い皆に人望のある大和甚三郎(福岡県出身)が先発する。ガルサ植民地では初年度に50家族から6人の犠牲者が出る。(「輝ける碧き空の下で」)

この第10回移民(帝国丸)の中にやはりビラ・コスチーナ耕地に配耕された上野米蔵(福岡県)、パラナ州選出元連邦議員アントニオ氏の嫡父、配耕時に60家族の邦人が就労していた。どの見る顔も日本人ばかりなので外国である事も忘れる程である。コロノ生活3ヶ年の内、2ヶ所で請負労働、年限が終わる頃には100家族近く就労していたが、次第に減っていた。米蔵は気の合った15~16家族と連絡を取り共同戦線をはって、同線モコカ耕地に移る。この耕地は石山ではないがマラリアの猛威に悩まされた。この耕地でも困難苦労を重ねた。米蔵もマラリアに冒されたが軽かったので助かった。モコカ耕地へ鎌田信一郎通訳に引率された。就労期限の終わる頃は矢崎節夫に変わる。(「上野米蔵伝」92ページ)

*神谷加那・1917年4月、河内丸、沖縄県島尻郡出身、就労後サントス市郊外に移り蔬菜栽培に従事、1944年カンポ・リンポ市に移転野菜作、食糧品店開業。(「ブラジル日系紳士録」)

*武井五郎、1917年、若狭丸、岐阜県美濃市、ビラ・コスチーナに配耕さらにガルサ市にて営農、この地で日語教師、植民地建設を手がける。(「ブラジル日系紳士録」917ページ)

*大和甚三郎(やまと)、1918年、博多丸、福岡県八女郡出身、コーヒー園に従事、のちガルサに移転(同地の草分け)一環して同地在住。(「ブラジル日系紳士録」537ページ)

*小松代太郎、1920年12月、土佐丸、長野県東筑摩郡筑摩地村出身、同耕地に配耕、当時の通訳は同県人の矢崎氏であり、氏への手前もあり就労すること5ヶ年後、ノロエステ線に移り養蚕業に邁進するが、ブラジル初期養蚕業は気候、技術の調和が充分研究されておらず、よく失敗する人々が多かった。後年トレスバラス移住地に入植する。（「トレスバラス移住地開拓 20 周年史」479 ページ）

*上坊凋夫、1922年5月、神奈川丸にて渡伯入耕、奈良県吉野郡十津川村出身、上田蚕種専門学校卒、ペナポリス協和植民地で日語教師等。（ブラジル日系紳士録 272 ページ）

*宮原敏夫、1922年5月神奈川丸、熊本県宇土郡不知火町長崎出身、同駅ビラ・コスチーナ耕地内に父親が9ヶ年も働いておりその許に直行する。その後ノロエステ線でコーヒーを育成。幾度と移転を繰返し聖市に在住する。（「熊本県人発展史」299 ページ）

*島津一喜、1929年11月、ラプラタ丸、熊本県鹿本郡来民町出身、同駅付近サンタ・カタリーナ耕地に就労すること4ヶ年、リベイロン市郊外のサンタ・リッタ耕地に移り1ヶ年働き、さらに幾ヶ所移転後リンコン駅グランジャ・サン・セバスチャン耕地で6ヶ年在住した。この耕地で母堂セツさんが1945年5月72歳で永眠した。後年パラナ州トレスバラス移住地コッケイロ区に入植する。（「トレスバラス移住地開拓 20 周年史」）